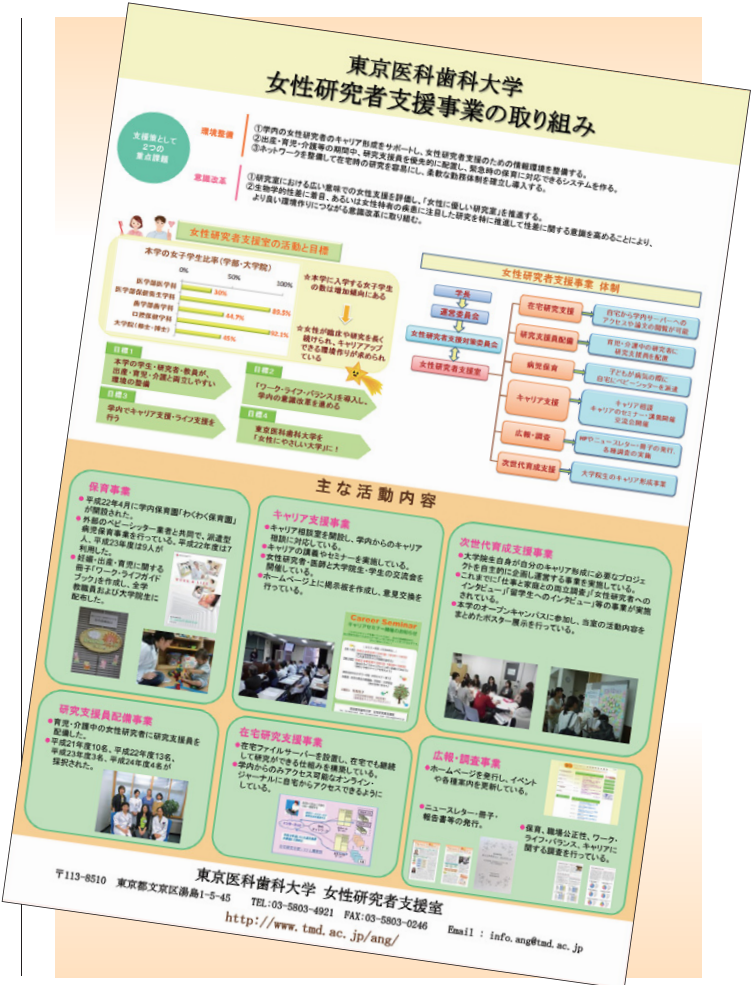


## 今年度の活動を振り返って ～次年度の事業の定常化に向けて～

女性研究者支援事業も平成24年度で5年目を迎えました。当事業は、平成20年度より文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」として採択され、3年間に渡って展開しました。平成22年度にモデル育成事業が終了した後、平成23年度は本学の「フォローアップ事業」として継続し、平成24年度も継続して実施しました(下図参照)。

これまでの主な活動として、「キャリア支援事業」、「次世代育成支援事業」、「研究支援員配備事業」、「保育事業」、「在宅研究支援事業」、「広報・調査事業」等に取り組んで参りました。平成24年度はキャリア支援事業を重点的に行い、学部カリキュラムとしてのキャリアの講義や講演・セミナーに積極的に取り組むとともに、次世代育成支援事業も参加メンバーを増員して実施しました。過去の参加メンバーが卒業して本学のOGとなり、現行の企画に卒業生としてインタビューに協力しているのを見ると、当事業の層にも厚みが増えてきたのを感じます。

平成25年度からは当事業が学内の定常化事業となり、併せて平成25年度から設置が予定されている、「学生支援・保健管理機構」の中の一部門として活動を行う予定です。定常化事業後も、学内の男女の方々が安心して学び、子供を産み育て、学業・仕事・研究と両立できるよう、更なる環境整備と意識改革を目指して参ります。今後も、学内の皆様のご支援・ご協力を賜れますよう、何卒よろしく願いたします。

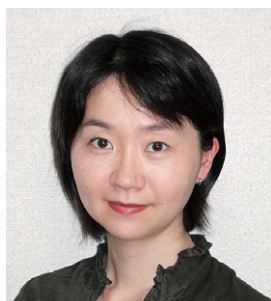


### 本学の女性研究者支援事業の歩み

年度	組織・体制
平成20年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 文部科学省科学技術振興調整費：「女性研究者支援モデル育成事業」として採択</li> <li>● 「女性研究者支援室」を設置、事業の企画・運営を担当</li> <li>● 対象組織は難治疾患研究所・生体材料工学研究所・疾患生命科学研究所</li> </ul>
平成21年度	対象組織を大学院医歯学総合研究科(医学部・歯学部含む)に拡大
平成22年度	対象組織を教養部に拡大し、全学を対象
平成23年度	モデル事業終了後は本学の「フォローアップ事業」として事業の継続
平成24年度	事業の継続、定常化に向けての準備
平成25年度以降	「学生支援・保健管理機構」の中で事業の定常化(予定)

## 研究支援員配備事業を利用されている方々のインタビュー

当室では、出産・育児・介護、あるいは女性特有の疾患により、キャリアのサポートが必要な方を対象に研究支援員を配置しています。今年度に利用されている4名の方々に、どのように事業を活用されているかお話を伺いました。



難治疾患研究所 生体情報薬理学分野 准教授 黒川 洵子さん

**1 研究支援員配備事業を利用して、どんなことが変わりましたか？ 具体的な改善面等も含めてお知らせ下さい。**

### ①研究・仕事の面

私の研究をサポートしてくれている研究支援員の方は博士号を持っており、研究補助をする上での知識や経験が豊富な方でした。以前に学内の他の研究室で研究補助業務をされていたために学内の状況にも詳しく、そのため様々なことへの導入が早かったため大変助かりました。

私の研究テーマは研究支援員の方にとっては新しい領域ではありましたが、興味を持って作業を行ってくれました。そのため、研究支援員の方がすでに持っている知識を活かして新しい領域に挑戦し、研究を行うことが出来たと思います。今後はその結果を論文にまとめて行ければと考えています。

研究支援員の方に業務を任せることで作業全体に余裕が生まれ、執筆作業を含めた自分の作業が中断されなくなりました。このことは私自身、とても影響が大きいです。研究には論文執筆や科研費・グラントの申請など、執筆作業が多くを占めていますが、以前は大学で行おうとすると中断されてしまうことが多く、自宅に持ち帰って夜に作業を行っていました。そのために睡眠時間を削っていたのですが、今の研究支援員の方がいらしてからは大学で落ち着いて書き仕事ができるようになり、とても助かっています。

### ②プライベートの面

研究支援員の方は、文京区の小学校で理科の指導員もされています。私自身も子供が文京区の小学校に通学しているため、彼女から小学校に関する様々な情報を教えてもらえるのは大変参考になります。また理科指導員としての立場から、子供の教育についてのヒントやアドバイスをいただいています。

また子供の小学校の保護者会や行事等で、止む無く少し外出しなければならないことがありますが、そんなときに研究支援員の方が自分の実験をつなげておいてくれるのも大変助かります。

**2 当事業の支援を受けたことで、業績が向上したものはありますか？**

書籍“Sex and Gender Differences in Pharmacology”において、“Sex and Gender Aspects in Antiarrhythmic Therapy”のチャプターを執筆しました。この書籍は、以前に女性研究者支援室が開催した「性差医学・医療セミナー」でご講演をされたドイツのVera Regitz-Zagrosek先生が筆頭で執筆されたものです。

その他にレビューを3本、論文を1本執筆しました。

**3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？**

①この事業は学内ですでに根付いてきていますが、その影響はとても大きいです。育児から学ぶことが多いのは事実ですが、実験系の基礎研究には長時間の実験が必要なことが多く、現実的には研究の障害になってしまいます。いくら気持ちはあっても時間は限られてしまうと、あきらめる人も多いのではないのでしょうか。その様なとき、このような事業があると、例え今が大変でも研究を続けてみよう、といった動機付けになるのではないのでしょうか。採択されるか否かはともかくも、「このような事業がある」という存在から、大学がサポートしてくれていると心強く感じます。まだ、育児をしながら研究するのはマイノリティですので、どうしても「疎外感」を感じて落ち込みがちですが、このような事業により「疎外感」が薄れ、研究のモチベーションアップにも役立っていると思います。

②支援が年度をまたいで継続できるようなシステムになってほしいと思います。現在はシステムの都合上、研究支援員の方のキャリアアップにはつながっているとは言えません。今後は研究支援員の方にとってもキャリアアップにつながるようになるとよいです。あるいは、いったん契約が終了しても、学内の他の研究室で働くことを選択できるといったシステムがあればよいですね。研究支援員の方にとっても、業務に慣れ、キャリアアップにつながるまでは最低1年の雇用期間は必要に思います。

**4 ご自身の今後の目標をお聞かせ下さい。**

メタボにならないようにしつつ、研究に集中することです。



## 5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

①最近になり立場が異なる人との接点が増えてきたこともあり、女性男性に関わらず、周囲にやさしい気持ちや心を持って接するのは大事だと考えています。ものの見方を変えれば許せることも多いはずですよ。そこから新たな発見があることも多いのではないのでしょうか。そういった目を持つと、もっと生きやすくなりますし、周りに人も集まりやすいように思います。

②「自分がどのような研究をしたいか」という目標を良く考えることが重要だと思います。そこを軸にして、人生の選択をするのが研究者だと思います。子供を産んだから、夫の状況がこうだから、ではなく、自分がどうしたいか、ということをお大切にできるといいですね。



難治疾患研究所 分子病態分野 特任助教 成瀬 妙子さん

## 1 研究支援員配備事業を利用して、どんなことが変わりましたか？ 具体的な改善面等も含めてお知らせ下さい。

### ①研究・仕事の面

今春より母の介護度が上がり(要介護5)、通院付き添いなども増えましたので、当初は実験の効率について心配致しましたが、研究支援員の配備を頂いたおかげで時間的、精神的に余裕が生まれました。介護のために実験が止まることなく、研究への取り組みも以前より積極的に行えるようになりました。また、期日までに遂行できるかという不安から躊躇しがちだった他施設との共同研究などにも、安心して加われるようになりました。研究が効率的に進展し、共同研究も増えたことで、研究の幅が広がりました。

### ②プライベートの面

精神的な余裕を持って介護や家事を行えるようになりました。以前は介護で実験が止まるストレスに加え、穴埋めのためにプライベートな時間を仕事に割かざるを得ないため、家族に罪悪感がありました。こうしたストレスを抱えて介護に向かい、両親に辛く当たったこともありました。研究支援員の配備を頂いてから順調に業績を出すことができ、安定した気持ちで介護を行えるようになりました。当事業のご支援を頂き、本当に感謝しております。

## 2 当事業の支援を受けたことで、業績が向上したものはありますか？

研究支援員配備事業のご支援を頂くようになってからは、論文、学会発表等コンスタントに業績を出させて頂い

ておりますが、本年度は新たに科研費を獲得することができました。継続してご支援を頂いたことが業績として形となり、それが研究費の獲得につながったと考えております。

## 3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

今後も是非事業の継続をお願いしたいです。女性にとって、介護や育児は自分自身の努力だけでは回避、軽減し難い事象であり、頑張る人ほど負荷がかかります。私にご支援を頂いたことでワーク・ライフ・バランスが改善され、仕事に対する意欲やモチベーションが向上しました。女性研究者に対するサポートは、多くの大学や研究施設ではまだまだ遅れており、本学における女性支援事業はそうした面からも意義あることだと思います。

## 4 ご自身の今後の目標をお聞かせ下さい。

短期的には日々の研究業務を頑張るといっていますが、大きな目標としては、大きさ、品格、謙虚さを備えた女性となり、社会の一員として活躍できるよう、努力して行きたいと思っております。

## 5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

性別としては女性ではありませんが、私自身は研究や仕事においては自分や相手の性別を意識したことはありません。研究を楽しんでゆくことが良い結果につながると思っています。





大学院医歯学総合研究科 分子細胞機能学分野 特任講師 **Olga Safronovaさん**

**1** 研究支援員配備事業を利用して、どんなことが変わりましたか？ 具体的な改善面等も含めてお知らせ下さい。

### ① 研究・仕事の面

My research assistant offers me a very valuable help in the lab, performing ongoing experiments. He also helps me by performing a time consuming extensive literature search to interpret my newest microarray data. Thanks to that, I can dedicate more time to discuss with students their research progress and teach new methodology. I was also able to finalize the current project for the submission to the research journal.

### ② プライベートの面

I am expecting my second child now. In the current condition I am extremely thankful for the support I can get from the research assistant. Needless to say, my older son is very happy to see his mother coming home earlier in the evening, and mother free of stressful thoughts on unfinished experiment at work.

**2** 当事業の支援を受けたことで、業績が向上したものはありますか？

Although it has not been accepted for publication yet, within the current term of the support program I wrote and submitted one research paper and one invited review paper.

**3** 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

I believe that research support personnel model will help many young mothers to make a decision to continue career. This support is very important for working mothers, especially with young children, that, considering lack

of sleep and high responsibilities at home, have a hard time to be fully competitive with other coworkers (male and single female).

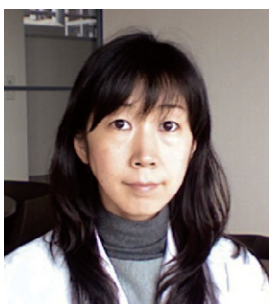
I wish this project will be continued and lead to long term support project in many aspects of research work and childcare. The good point would be to have flexible application dates and provide support starting from any month. Having possibility to apply for support during maternity leave may also help mothers to return back to work earlier and relief their stress.

**4** ご自身の今後の目標をお聞かせ下さい。

I am expecting my second child to be born soon and nearest months I will be occupied with happy duties of mother of newborn. Hopefully I will be able to resume research job some time around summer. My other research project is about to be finished. I am planning, if it will be possible, to start writing a paper during maternity leave and perform final experiments as soon as I will be back to the lab bench.

**5** 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

Women who have high goal and believe in success have a power to achieve it. However, even if you would like to do everything it is impossible to be perfect in everything. This will eventually lead to stress and depression. That is why, it is important to keep reasonable balance in work and family life. The only way to achieve many goals in your life is to choose priorities and to concentrate on them. And what is even more important is to be flexible in your plans and have freedom to change priorities as time passes. Try to seek help and understanding from your family members and colleagues. If you believe in yourself you can achieve all the goals.



大学院医歯学総合研究科 臓器代謝ネットワーク講座 特任助教 **伊藤 美智子さん**

**1** 研究支援員配備事業を利用して、どんなことが変わりましたか？ 具体的な改善面等も含めてお知らせ下さい。

### ① 研究・仕事の面

私は産休中から当事業を利用させて頂きました。研究の性質上、マウスを扱う実験

が中心となるため、マウスの維持・繁殖を継続する必要があります。産休中にもメールでやり取りをしながらマウスの管理をお願いできたおかげで、復帰時にスムーズに仕事を再開することができました。復帰後はマウスの管理に加え、実験補助、データ整理などを手伝って頂き、研究室にいられる時間は長くありませんが、効率よく仕事ができていると思います。



## ②プライベートの面

デスクワークは家に持ち帰ってしまいますが、実験に関して精神的に余裕が持てるおかげで、家族との時間も大切にしながら仕事を進められています。

## 2 当事業の支援を受けたことで、業績が向上したものはありますか？

短期間のことなので、まだ具体的な形にはなっておりません。

## 3 当事業について、改善点やご意見など、コメントをいただけますか？

私は研究室に既に勤務していた方に研究支援員をお願いできたのですが、採用期間や勤務時間に合致し、スキルを持った方を探すのが非常に難しいと思います。研究支援員を紹介して頂けるようなシステムがあると、より有効に活用できるのではないのでしょうか。

## 4 ご自身の今後の目標をお聞かせ下さい。

時間的な制約がある中で、研究室の方々や家族に様々なサポートをして頂いていることをとても感謝しています。体力的、精神的につらいときもあります。研究者としてステップアップし、家族に対しても胸を張れるような仕事をしたいと思います。

## 5 次世代の女性研究者へのメッセージをお願いします。

女性は様々なライフイベントによって働くペースを変えざるを得ないときがあります。その中で仕事を続けていくには、周囲の方々の理解が必要不可欠です。自分の力でできること、できないことをしっかり認識し、具体的にどのようなサポートが必要なのか自分から発信することも大事だと思います。私自身、試行錯誤の毎日ですが、一人でも多くの女性研究者がキャリアをあきらめることなく力を発揮できることを願っております。

## Career Support



### 学年混合選択セミナーにおいて キャリアの講義を行いました。

平成24年度の学年混合選択セミナー（歯学部3年生～5年生対象）において、女性研究者支援室の有馬 牧子特任助教がキャリアの講義を担当しました。セミナーは4月～5月中旬の前半部と、5月中旬～6月までの後半部に分けられており、前半部では「自分らしいキャリアを創るには」をテーマに、後半部では「キャリアupのためのコミュニケーション」をテーマに講義を行いました。

前半部の講義では、キャリアや自己理解について学び、医療者として男女ともに様々なキャリアがあることを知り、今後のキャリアプランの道筋を立てられるようにすることを目的としました。参加した学生からは、「将来の仕事と家庭との両立方法について考えることができた」、等のコメントが寄せられました。

後半部では、キャリアを作っていく上で必要な「コミュニケーション力」を身につけ、今後の人間関係やキャリア形成に役立てることを目的としました。自分の物の考え方やコミュニケーションのパターンを理解するグループワークを行い、職場や家庭など、周囲とより良い人間関係を築くためのコミュニケーションスキルを学びました。この講義で学んだことが、将来の患者さんとのコミュニケーシ

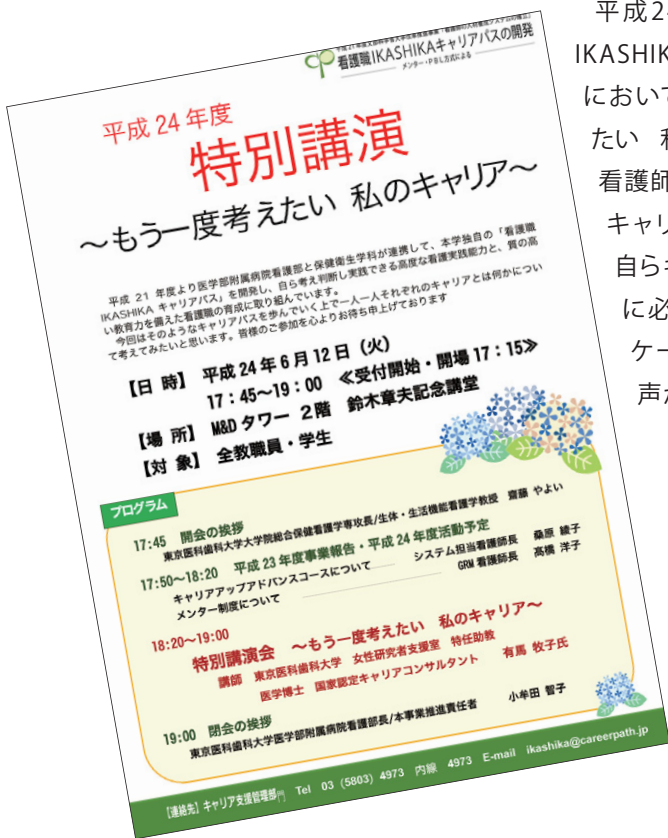


ョンの取り方や、医療カウンセリングを考える際のヒントとして頂きたく思います。

このようなキャリアに関する講義を教育カリキュラムの一部として行う大学機関は増えて来てはいますが、まだ全体的には少なく、特に歯医学系では少ない状況です。早い時期から学生がキャリアを考えることで、今後の医療従事者としての目的意識がより明確になることから、今後も継続してキャリアの講義の実施をして参ります。



## 看護職の方を対象にキャリアの講演を行いました。



平成24年6月12日(火)に看護部と保健衛生学科による「看護職IKASHIKAキャリアパスの開発:平成24年度事業報告会と特別講演会」において、女性研究者支援室の有馬 牧子特任助教が「もう一度考えたい 私のキャリア」をテーマに講演を行いました。参加者は附属病院の看護師178名、保健衛生学科から9名、そして他病院からの5名でした。キャリアとは何か、看護師として自分のキャリアを考えることの意味、自らキャリアデザインを考えること、そしてキャリアアップするために必要なことや課題等について講演を行いました。参加者のアンケートからは「また明日から頑張ろう!勇気づけられた!!」などの声が寄せられていました。



## キャリアのセミナーを行いました。

平成24年6月15日(金)、6月19日(火)に2回連続で本学の学生、教職員を対象としたキャリアセミナーを行いました。このキャリアセミナーも毎年恒例となり、職種やポジションを超えて、毎回学内から多くの方々が参加されます。今回のセミナーも満員となり、立ち見が出るほどでした。講師は、

女性研究者支援室の有馬 牧子特任助教が務めました。

第1回は「自分の価値観を知ろう・これまでのキャリアを振り返ろう」をテーマに実施しました。これまで自分が歩んできたキャリアの振り返りを行い、グループに分かれてディスカッションを行いました。

第2回は「自分のライフキャリアレインボーを描いてみよう・現在と今後のキャリアをデザインしよう」をテーマに実施しました。キャリアとは「人生のある年齢や場面における様々な役割の組み合わせ」であることから、現在自分が持っている役割を確認するグループワークを行いました。それにより、自分の持っている責任や使命、価値感、興味・関心事が分かりやすくなり、キャリアの方向性を考える有用な手段になります。参加者の方々にアンケートを行ったところ、「就職支援とは別の、自分の生き方や価値観を見直せるようなキャリアセミナーに参加できて良かった。また開催して欲しい」等の声が聞かれました。次年度も継続してキャリアセミナーを実施して参りますので、学内の皆様のご参加をお待ちしています。





## 「若手研究者キャリアデザイン事業」を実施しました。

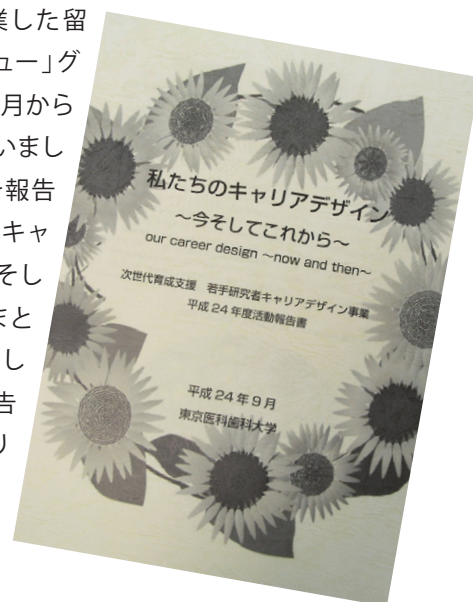
「若手研究者キャリアデザイン事業」は、今年度で3回目の実施を迎えました。

この事業では、参加メンバーである女子大学院生が自身のキャリアの悩みや課題を明らかにし、それを解決するための自主企画を実施します。それにより女子大学院生が今後のキャリアパスの選択肢を知り、自分に適したキャリアを計画できることを目標としています。これまではインタビュー事業や調査事業、セミナー開催等の自主企画を行ってきました。これら企画を実施することで、「将来、仕事やプライベート上の困難をどう乗り越えて行くのか?」、「これから女性研究者としてどのように働いていくのか?」、「研究と育児とをどのように両立するのか?」等を考え、今後の自身のキャリアパスをデザインしやすくしています。



今回、メンバーとして活動することになったのは大学院歯医学総合研究科および保健衛生学研究科に在籍し、学業・研究・臨床を行っている女子大学院生11名です。そのうち、3名はバングラデシュとカンボジアからの留学生でした。

平成24年5月16日(水)に参加メンバーでキックオフミーティングを行い、何が女子大学院生のキャリアの課題となっているか、どんなことがキャリアの不安になっているかを話し合いました。課題が類似しているメンバー同士でグループを作り、「①本学における仕事と家庭との両立に関する調査」グループ、「②卒業生へのインタビュー」グループ、「③本学を卒業した留学生へのインタビュー」グループに分かれ、5月から9月まで活動を行いました。これらの活動を報告書として「私たちのキャリアデザイン～今そしてこれから～」にまとめ、9月に発行しました。当室HPでも報告書を公開しておりますので、どうぞご覧ください。



### ①「本学における仕事と家庭との両立に関する調査」グループ

参加メンバー

Sharika Shahrin (代表) (歯医学総合研究科・スポーツ歯学分野 博士課程3年)  
江川 京子 (保健衛生学研究科・国際看護開発学分野 博士課程1年)  
Towfiqua Mahfuza Islam (歯医学総合研究科・政策科学分野 博士課程2年)

「本学における仕事と家庭との両立に関する調査」グループでは、本学の既婚の日本人教職員・学生及び留学生、外国人教職員を対象に、仕事と家庭との両立の状況を調べ、本学の両立支援に必要な仕組みや、今後の学業や就業の環境改善について提案を行いました。そのため学内向けに、ウェブ上でのアンケート調査を8月に実施しました。留学生も調査に参加できるように英語の設問も作成し、調査への参加を促しました。また両立の状況を更に詳しく知るため、外国人・日本人の既婚のカップルを対象に、インタビューも実施しました。

アンケート調査・インタビューの実施により、留学生・外国人教職員と日本人学生・教職員との両立の状況・支援ニーズ

の違いを比較することができました。本学に求められている両立支援策として、日本人・外国人教職員の両方で最も多かった回答は「育児・介護のための柔軟な勤務制度」、「有給休暇や休業等を取りやすくするための環境改善」でした。外国人教職員では、「わくわく保育園の保育料値下げ」が日本人よりもニーズが高く、留学生では「学費等への経済的な支援」、「留学生のためのコミュニケーションの支援」が多く回答されていました。言語の不自由さによる学業・研究の支障を改善するために、現状の支援以上の解決策が必要であると考えられます。今後も、ニーズの高かった支援策を本学に提案していく予定です。



## ②「卒業生へのインタビュー」グループ

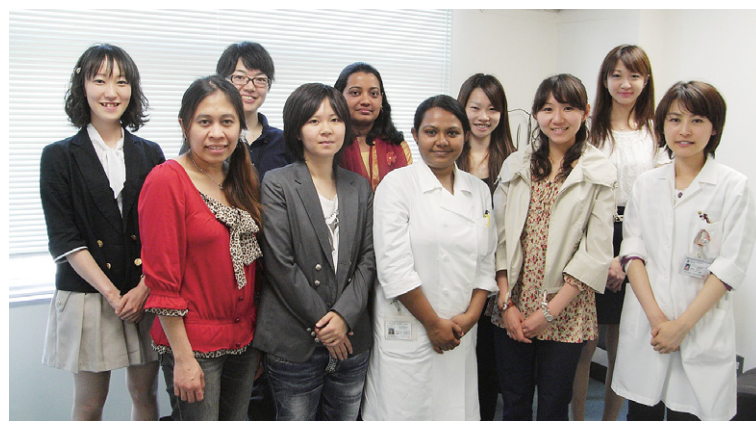
### 参加メンバー

- 小林 桃子(代表) (医歯学総合研究科・精神行動医科学分野 修士課程1年)  
天野 麻友美 (医歯学総合研究科・難治疾患研究所 幹細胞制御学分野 修士課程1年)  
河合 富貴子 (医歯学総合研究科・消化器病態学分野 博士課程2年)  
木地山 真実 (医歯学総合研究科・免疫治療学分野 修士課程1年)  
栗林 恵美 (医歯学総合研究科・う蝕制御学分野 博士課程4年)  
五領田 小百合 (医歯学総合研究科・難治疾患研究所 分子細胞循環器学分野 修士課程1年)

「卒業生へのインタビュー」グループでは、現在アカデミックポジションや企業等で活躍している本学の女性の卒業生11名にインタビューを行いました。インタビューでは「本学での学生生活をどのように過ごされていたか」、「進路決定の際に迷ったこと」、「現在の仕事のやりがい」、「人生のターニングポイント」、「プライベートの時間の過ごし方」等、具体的な体験談を幅広く聞くことができました。また、当事業の過去の参加メンバー2名にも卒業生として

インタビューを行いました。

卒業生にインタビューすることで、参加メンバーも自身の「ロールモデル」に出会うことが出来、今後の進路を考えるのに重要なアドバイスを頂きました。また卒業生も同様のキャリアの悩みを抱えていたことを知り、メンバー自身の今後のキャリアの不安を軽減するのに役立つと共に、本学の女子大学院生にキャリアデザインの幅広い可能性を提示することが出来ました。



## ③「本学を卒業した留学生へのインタビュー」グループ

### 参加メンバー

- Kalyan KONG(代表) (医歯学総合研究科・う蝕制御学分野 博士課程1年)  
鵜鷹 佐知子 (医歯学総合研究科・う蝕制御学分野 博士課程4年)

「本学を卒業した留学生へのインタビュー」グループでは、本学に以前に留学し、現在は各国で活躍している卒業生8名にインタビューを行いました。本学で学び、研究を行った留学生に、現在の仕事内容や生活、これまでの経験、仕事と家庭との両立方法、後輩へのアドバイスなどをインタビューすることで、現在の本学の留学生がキャリアプランを計画する手助けとすることを目的としました。海外にいる本学出身の留学生とはメール書面で、「海外と日本との女性研究者を取り巻く環境の違い」や、「どのように仕事

のモチベーションを保っているか」、「仕事面、プライベート面での成功の秘訣」等についてインタビューにご協力いただきました。

本学を卒業した留学生のグローバルな活躍の様子や、これまでの経験、家庭との両立方法などを知ることで、研究者の多様な価値観や生き方を知る良い機会となりました。留学生や女子大学院生にとっても、キャリアを計画するにあたっての選択肢が広がりました。





## 交流会&ランチパーティーを開催しました。

平成24年8月8日(水)に「若手研究者キャリアデザイン事業」に参加しているメンバーで交流会を開催しました。交流会では、前半に「卒業生へのインタビュー」、「本学を卒業した留学生へのインタビュー」、「仕事と家庭との両立に関する調査」の各グループリーダーが活動の進捗状況について中間報告を行い、今後の課題などについても発表を行いました。その後、事業報告書の作成方法やスケジュールについて、当室スタッフより説明が行われました。



交流会の後半には、各メンバー1品ずつ持ち寄りのランチパーティーを行い、サラダや各種前菜、メインディッシュ、主食、デザートなどの様々な料理の逸品がテーブルに並びました。また参加メンバーである留学生が作ったバングラデシュ料理やカンボジアのデザートも彩りを添えました。交流会を通じて、他のグループメンバーとも親睦を深めることが出来、後半の活動に向けての思いを新たにすることができました。

## Open Campus



## オープンキャンパスに参加しました。

平成24年7月25日(水)、26日(木)の本学のオープンキャンパスにおいて、「次世代育成支援事業」の一環として、当室の活動に関するポスター展示・発表を行いました。高校生や学生、その保護者の方など2日間で3,000人の方々が来場されました。

毎年、オープンキャンパスでは当室のポスター展示と出版物の配布や、参加者の方々の将来の夢をポスターに書き出すイベントを行っていますが、今年は「若手研究者キャリアデザイン事業」の活動紹介も併せて行いました。事業の各グループで活動内容のポスターを作成し、各メンバーが交代でブースの前に立ち、参加者の方々に活動の紹介を行いました。事業

のメンバーである女子大学院生が、グループの活動内容を直接ご紹介したことで、これから本学に入学を検討している学生の方々に女性支援や次世代育成支援の必要性を知って頂く良い機会となりました。また参加者の方々からは、本学での学生生活や日常の研究生生活についても質問が寄せられ、打ち解けた雰囲気での交流が深めることが出来ました。「若手研究者キャリアデザイン事業」の参加メンバーも、オープンキャンパスでの初めての取組に、「参加できてとても楽しかった」とコメントしていました。今後のオープンキャンパスでも、このような取組を続けていきたいと考えています。



## 「女性研究者研究活動支援事業合同シンポジウム」に参加しました。

平成24年11月20日(火)にJST東京本部(千代田区四番町)にて開催された「女性研究者研究活動支援事業合同シンポジウム」に有馬 牧子特任助教が参加しました。女性研究者支援事業を実施している全国の大学・研究機関が集合し、午前中は各機関で構成される分科会(A～Fの6グループ)が開かれ、グループごとにディスカッションが行われました。本学は医学系機関で構成されるDグループに参加し、本学以外には福島県立医科大学、京都府立医科大学、奈良県立医科大学、東京女子医科大学、東邦大学、順天堂大学、滋賀医科大学で構成されていました。分科会では、以下のテーマについてディスカッションを行いました。

1) 女性研究者数(女性限定公募の必要性、女性研究者を増加させるために必要な部局執行部・女性研究者等の意識改革、離職抑制等)、

2) 女性研究者の研究・教育業績、

3) 女性リーダーの育成、

4) 女性研究者支援の課題とこれまで得られた解決策、

5) 今後の新たな方策に向けて

分科会では、「学位・専門医を持った人を大学に残すため、科研費応募を助教以上に限定せずに、大学院4年生でも可能にするなど、院生への支援の幅を広げてほしい」、「医学研究者は9～5時は診療に追われ、研究に割く時間がないため、良い臨床医ほど時間を取られる。従って、昇格にあたっては「臨床・教育」と「研究」を分けて評価してはどうか」といった、医学系機関ならではの課題等について話し合うことができました。

午後は文部科学省のご担当者より「女性研究者研究活動支援事業」について説明がなされたのち、各分科会でのグループディスカッションの発表が行われました。その後、パネルディスカッションが行われ、「成果の検証と課題解決のための模索」をテーマとして、モデレーターに山村康子氏(独立行政法人科学技術振興機構 科学技術システム改革事業プログラム主管)、パネリストに郷通子氏(大学共同利用機関法人情報・システム研究機構理事)、小舘香椎子氏(独立行政法人科学技術振興機構 経営企画部男女共同参画主監)、後藤俊夫氏(中部大学副学長)、渡辺美代子氏((株)東芝イノベーション推進本部参事)を迎え、今後の各機関でのシステム改革や環境整備の必要性について討論が行われました。



## 東京大学の「晩婚化時代のライフプランニング講座」に参加しました。

平成24年12月1日(土)に東京大学駒場キャンパスで開催された「晩婚化時代のライフプランニング講座」に有馬 牧子特任助教が参加しました。晩婚化が進む中、自分はいつまで子供を産めるのか、子供を欲しいと思ったときに授かれるのかといったことは、女性が今後のキャリアをプランニングする際の重要な事項の一つです。

講師に斎藤英和氏(国立成育医療研究センター 母性医療診療部不妊診療科医長)、白河桃子氏(少子化ジャーナリスト)を迎え、医学面・経済面・社会面から、女性のライフプランニングについて講演が行われました。

講演では、女性が仕事と出産の両面を考えた際、キャリアをある程度形成してから産むパターンと、キャリアを形成する前に出産を終えてしまう2パターンがあり、それぞれのメリットとデメリットについて紹介がなされました。また、「産みやすい組織」のバロメータとして、「女性の育休取得率が高いこと」、「女性役職者の数が多いこと」、「男女勤続年数の差が少ないこと」などが挙げられました。女性がキャリアを続けて行くためには、柔軟な勤務体制、職場の協力、家族の協力、女性自身の経済力が必要であると述べられ、参加者からは「20代・30代・40代と、これからどのようなことを心がけて過ごしたら良いキャリアが作れるのか」等、具体的な質問が寄せられました。







## 順天堂大学の「女性外科系医師・研究者からのメッセージ」に参加しました。

平成24年12月22日(土)に順天堂大学で開催された「女性外科系医師・研究者からのメッセージ～次世代女性研究医への期待～」に有馬 牧子特任助教が参加しました。最初に、「若手外科系女性研究者からの研究紹介」がなされた後、「外科領域女性リーダーとしての取組」として、加藤庸子氏(藤田保健衛生大学医学部脳神経外科学教授)が「外科女性医師へのメッセージ～一緒に頑張りませんか～」をテーマにご講演されました。加藤氏は、女性医師が外科系の領域で仕事を続けて行く場合は、早めに自分のロールモデルを見つけて積極的な交流を持つことが必要であり、「Hoc age(今の仕事に精を出せ)」、「Carpe diem(今を楽しめ)」、「Amor fati(汝の運命を愛せ)」の3つの言葉を今後の女性医師へのエールとして贈られました。

その後、加藤聖子氏(九州大学大学院医学研究院 生殖病態生理学分野教授)より「産婦人科における男女共同参画実現のために」についてご講演がありました。加藤氏は二人のお子さんを育てたご経験から、両立が大変なときこそ周囲の理解が必要であり、そのためには日頃から周囲に感謝をし、自分が医学の進歩へ貢献しているという覚悟を持ち、成果を上げておくことが必要であると述べられました。

最後に齊藤光江氏(順天堂大学大学院医学研究科乳腺・内分泌外科学教授)より「女性医師のリーダー育成について」をテーマにご講演がありました。齊藤氏は、育児中の女性医師の雇用を促進するためには、時短勤務、時間外のカンファレンスの免除、当直免除をどのように実現するかが課題であり、同時に男性医師へのフォローも必要であると述べられました。外科領域ならではの実践に即した取組について、活発な討論が行われました。



## 大阪府立大学の「ロールモデル・セミナー 世界に翔け!理系女子大学院生表彰公開審査会」に参加しました。

平成25年1月25日(金)に大阪府立大学で開催された「ロールモデル・セミナー&世界に翔け!理系女子大学院生表彰公開審査会」に有馬 牧子特任助教が参加しました。前半は、蓑田裕美氏(株式会社資生堂 資生堂リサーチセンター資生堂女性研究者サイエンスグラント事務局/国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター)が講師を務めました。後半は、最終審査出場者応募者である女子大学院生6名が自分の研究テーマについて流暢な

英語でプレゼンテーションを行いました。その後、各プレゼンテーションに対する講評がなされ、最優秀賞1名が選ばれました(高井飛鳥さん・工学研究科)。優秀賞には他の出場者の5名が選ばれ、学長から表彰がなされました。このような大学院生による取組は、今後の本学での次世代育成支援事業の参考にしたいと考えています。





### 「本学で出産・育児を経験している方のインタビュー集」を発売しました。

女性研究者支援室では、出産・育児と仕事・学業との両立に関する冊子「本学で出産・育児を経験している方のインタビュー集」を12月に発売しました。

特に大学院生や若手の女性研究者にとって、将来出産・育児を経験し、仕事と両立できるかどうかは、今後のキャリア継続における大きな課題です。また女性が育児と仕事を両立するためには、男性の育児への積極的な参加も望まれています。そこで、19名(女性17名、男性2名)の本学関係者の方々から、仕事・学業と育児とを両立する上で苦労されたこと、育児との両立のための心構えや工夫等についてインタビューにご協力頂きました。学内にも配布を行っていますが、追加部数をご希望の方は当室までご連絡ください。

### 病児保育サービスについて

現在育児中の方にとって、お子さんが急に熱を出したときなど、自分の仕事を急に休めるか・・・ということは常に気がかりではないでしょうか。当室ではそのような際、病気の子供のケアを行ってくれる「病児保育事業」を行っています。今年度はピジョンハーツ株式会社と連携し、お子様の急な発熱時などに自宅まで保育士が派遣され、病児のケアを提供しています。

平成24年度は、15世帯の方々(子どもの数21名)が利用登録をされ、「シッターさんは慣れており、落ち着いている方に対応レベルも高く、安心できた」といったご意見を頂いています。今後も、より皆様のニーズに合った病児保育サービスを提供できるよう、当室で検討を進めてまいります。

### 学内保育所「わくわく保育園」について

平成22年の4月に開園した学内保育施設「わくわく保育園」も、今年度で3年目を迎えます。利用者の数も年々増加しており、平成25年2月現在では、常時保育の利用者が20名、一時保育が8名です。特に一時保育では、夏休みの7～8月頃の利用が増加しています。



利用者の方々からは、「学内にあるので、急に発熱してもすぐに迎えに来られる」、「常に子供と近くにいるという安心感がある」、「子供と一緒に通勤出来るので、余裕を持って送迎ができる」等のコメントを頂いています。今後もわくわく保育園では、学内の教職員・学生の皆様の仕事・学業と育児との両立を支援して参ります。

### ポジティブ・アクションについて

内閣府男女共同参画局では、「社会のあらゆる分野において、2020年までに、指導的地位に女性が占める割合が少なくとも30%程度になるよう期待する」という目標を達成するため、

女性の参画を拡大する施策の一つであるポジティブ・アクションを推進しています。本学のポジティブ・アクションの取り組み内容も以下のURLにてご紹介していますので、ご覧ください。

[http://www.gender.go.jp/main\\_contents/category/positive\\_act/data/university/u02.html](http://www.gender.go.jp/main_contents/category/positive_act/data/university/u02.html)



東京医科歯科大学 女性研究者支援室

〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-45 1号館西5階 522号室

Email: [info.ang@tmd.ac.jp](mailto:info.ang@tmd.ac.jp)

電話:03-5803-4921 FAX:03-5803-0246

URL: <http://www.tmd.ac.jp/ang/>